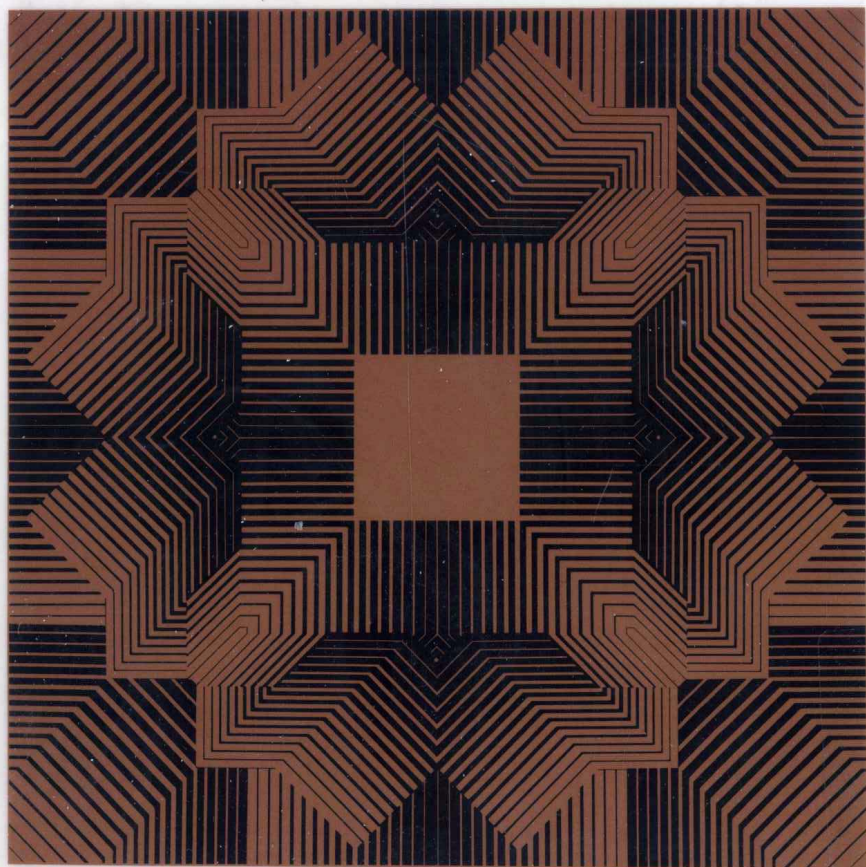


庶民仏教と古典文芸

江本 裕 編
渡邊昭五

SEKAISHISO SEMINAR



庶民仏教と古典文芸

江本 裕 編
渡邊昭五

世界思想社

庶民仏教と古典文芸

定価 1,950円(本体1,893円・税57円)

1989年5月20日 初版発行

編 者 え もと ひろし
 江 本 裕
 わ な し
 た べ しょう
 渡 邊 昭 五

発行者 高 島 国 男

世界思想社

本 社 京都市左京区岩倉東五田町77
 電話(721)6506~7振替京都0-2908
東京支社 東京都千代田区猿樂町1-4-8
 松村ビル

© 1989 H. EMOTO, S. WATANABE Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします (共同印刷工業・藤沢製本)

ISBN4-7907-0349-5

目次

序章

総説Ⅰ

庶民仏教の幕あけとその文芸……………

渡邊 昭五 3

はじめに 3 庶民浄土教の幕あけと法然 4 法然登場前夜の空也と源信 6 庶民仏教への方法としての唱導文芸 7

総説Ⅱ

近世の仏教と文学……………

江本 裕 14

近世の仏教 17 唱導の文芸—正三と了意 17 風雅の文芸—策伝、また俳諧など 19 語り物の文芸—説経・浄瑠璃 21 談義のひとり歩き—仏教勸化本・談義本など 22

第一章

古代—中世Ⅰ

梁塵秘抄—中世庶民仏教の幕あけを示した歌謡……………

渡邊 昭五 25

はじめに—庶民往生思想の序幕 25 庶民感情の中に謡われた仏教啓蒙意識 27 蟻の熊野詣 33 聖（私度僧）たちへの庶民の視線 37 むすびに 43

第二章

中世Ⅱ

説話文学—仏教の庶民化と地方化……………

田嶋 一夫 44

中世説話文学の始まり—地方への睽目 44 仏教説話集の成立

45 古代往生伝から中世の往生伝へ 46 僧伝の集成 49 東

国伝承のすくい上げ 52 縁起の時代 55 世界の拡大―琉球
への視点とヨーロッパ 57 中世説話文学の終焉 59

第三章

中世Ⅲ

平家物語―複合思想としての宗教……………

高橋 伸幸

61

はじめに 61 平家物語の庶民層 63 信仰世界の時代相 66
おわりに 74

第四章

中世Ⅳ

絵解き―浄財募金のための啓蒙とその宣伝性……………

渡邊 昭五

75

はじめに―大衆啓蒙としての絵解き 75 浄土教画による浄土
の具象化 76 三大浄土曼荼羅とその説話 77 弥陀来迎図の
諸相 80 祖師高僧の掛幅絵伝 90 社寺参詣曼荼羅 93

第五章

中世Ⅴ

能……………

岩崎 雅彦

100

はじめに 100 地獄の描写 102 利生譚 106 説法の間 108 修羅
道の描写 110

第六章

中世Ⅵ

太平記読み……………

石井由紀夫

115

軍語りと陣僞 115 中世における太平記の享受 119 近世の
「太平記読み」 123

第七章 近世Ⅰ 説経・古浄瑠璃と仏教——語りと絵……………阪口 弘之 130

はじめに¹³⁰ 「熊野の本地」の諸本関係¹³⁰ 絵解き「懐胎十月の御姿」¹³⁴ 太子伝絵解きと聖徳太子御伝記¹³⁷ 女人かうやさんけい記の語り口調¹⁴¹ 正本挿絵の案内記的性格¹⁴⁴

第八章 近世Ⅱ 教義問答体草子の実相——寛永期の作品を中心に……………江本 裕 151

はじめに¹⁵¹ 清水物語の排仏¹⁵² 祇園物語の反論¹⁵⁴ 清水物語と祇園物語¹⁵⁶ 清水物語の本質¹⁵⁷ 祇園物語の反応¹⁶³ 大仏物語の儒仏論¹⁶⁷ 付説¹⁶⁹

第九章 近世Ⅲ 通俗仏書と仮名草子……………堤 邦彦 172

近世の通俗仏書¹⁷² 中国仏教説話の博索と移入¹⁷⁴ 事実性の強調と見聞譚の系譜¹⁷⁶ 怪異小説・奇談雑筆との接点¹⁷⁹ 仏教唱導と仮名草子¹⁸¹ 因果物語の唱導性¹⁸³ 唱導話材の文芸化¹⁸⁵ 冥府観の確立と廻獄譚¹⁸⁷ 都鄙の地獄語り¹⁸⁸ 庶民信仰との関わり¹⁹¹

第十章 近世Ⅳ 噺——近世前期を中心に……………石川 了 193

噺の系譜¹⁹³ 近世における二要素¹⁹⁴ 噺の担い手としての僧¹⁹⁷ 三都の名人¹⁹⁸ 噺本にみる談義の口演²⁰² 噺本に表れた仏教宗派²⁰⁶ 談義本への一視点²⁰⁹

第十二章 近世V

談義本・勸化本・実録と近世中期新文芸……………井上 啓治 210

中期文芸史概観——三分割論 210 中期概観——文運東漸と思想的

背景 212 江戸っ子 215 享保の改革と庶民教化啓蒙運動 217

舌耕芸人と辻談義 219 残口系（舌耕系）談義物の成立 222

当世下手談義の出現 225 教訓談義物から滑稽談義物へ 228

風来山人平賀源内と戯作 229 粹談義物 233 純粹談義本 234

勸化本 234 実録と馬場文耕 236

参考文献 243

索引（事項・作品名・人名）

庶民仏教と古典文芸

序章

総説Ⅰ 庶民仏教の幕あけとその文芸

渡 邊 昭 五

はじめに

大陸において、初唐時代の高僧の善導（六一三―八一年）が、中国の浄土教を体系化し、称名念仏を往生の要諦の行としたことが、半世紀を経て、我が国の庶民浄土教の幕あけとなる。後進国ほど貧富の格差が大きい……という一般事象を縦の流れの型に嵌めてみるならば、十二世紀の入り口は、島国が発展する一つの折り目にもなる。そのトンネルを抜け出た事象が浄土へ対する観念の変革である。法然が比叡山の山の中にあつて、書物と向きあいつつ、自己の人生にあるひらめきを持ったとすれば、歴史事象の因縁因果にも、仏教が人間関係などに譬える巡りあわせとか時運に似たパターンを感じさせてくれる。極端な言い方をすれば、中国の善導が日本史を変えた、ともいえよう。

浄土往生に念仏のみでよいとした、この思想の大変革は、日本文化史の最大の折り目となった。この一つの事象から、思想史がガラリと変わった。そのことは、表れ出た諸事象の九牛の一毛にしかすぎない文学の諸作品を一瞥しただけでも納得できよう。古代末期より中世にかけての十二世紀末から十三世紀は、政治や経済の大転換期であり、社会・文化・風俗の一大変成期でもあった。日本史を顧みて、こ

れだけあらゆる物象が変質した時代は、明治維新の十九世紀末くらいで、この二つの屈折期はともに日本史の上の二大革命期といえるであろう。

政治の担い手が、皇貴族たちが蔑んでいた庶民階級の武家に移り、土地制度も律令制の公地公民の崩壊期（荘園制）の姿を曝して、封建制へと変わる。封建制という土地制度も、今日の如く情報伝達が始ければ、これほど叛乱を恐れる方法をとらなくてもよかったのであろうが、電話もテレビもファクシミリもない時代であったから、「恩」とか「忠」という倫理を押し売りするような社会が生まれてくるのである（敢えて、余談をいうなら、電話のある時代に「忠」を押し売った教育勅語オンリー及び東京帝大中心の教育政策が第二次大戦の惨めさを招いたといえる）。通俗的汚穢性や地方性を具えていたがために軽蔑されてきた庶民階級の武士が、次々と公達きんだちの社会に加わってのし上がってきたために、貴族本位の仏教の往生化も、庶民性を帯びてくる。社会倫理観も変質すれば、それに伴う風俗や文芸を含めた文化も生活様式も、皆々……徐々に変成していくのが十二世紀なのである。

このような歴史的因果をあらわに痕しるした中世への起承転結を、庶民化仏教の影響がなければ決して生まれてこなかったであろう文芸作品の上に、逐一社会的背景やその風俗を見ながら近世までも一覽してみようと、意図したのが本書の目的である。

庶民浄土教の幕あけと法然

古代末期の仏教は、天台法華宗を中心とした密教（台密・東密）と南都六宗の顕教（三論・成実・法相・俱舍・華嚴・律）をあわせた顕密八宗で、皇貴族往生を目途とする浄土教が中心であった。すなわち、持律持戒・造寺造仏造塔を課する「善人正機」の仏教である。浄土往生の条件が、自己に与えられる戒律であれば、意志が強く学が深い知識人でなければ浄土を志向できない。所得が低ければ造塔造仏も叶

わない。文字が読めなければ経を誦したり、教義すら理解することができない。しかし、そんな条件をみたせる人々は、皇貴族の中にあってもほんの一つまみの数であって、世の一般大衆から被差別層にいたる全人口九十パーセントの貧困に喘ぐ古代末期の人たちは、浄土への憧れすらも抱くことができなかったのが、当代である。そもそも「善人」とは「善男子」のことであって、前世に善の功德を積んだ人の意、すなわち前世の因縁によって現世の境遇が招来される、としたものである。低所得層・無産者・不具者に生まれ出た宿命は、前世の不精進の結果であって、前科者として差別されるのが、平安貴族仏教であった。これらの積善の結果とされた皇貴族の「善人」に対して、一般大衆を含めた残りの九割の「悪人」たちに浄土往生の機会均等を説いたのが、法然である。法然は、今までの体制下にあった顕密八宗の外に、私的な浄土宗を開創し、『選択本願念仏集』において、阿弥陀如来は差別なく「悪人」も浄土往生を叶えてくれる、と説いた。これを嗣いだ親鸞は、さらにこの法然論を発展した、自力に頼らないで阿弥陀のみを頼る他力本願の「悪人」のみしか往生できない、と『歎異抄』に説く。ここに、古代仏教の善人正機は逆転して、悪人正機の有名な論が展ひろげられるのである。想像するに、親鸞はクセのある、アクの強い人間だった、と思う。

難行苦行や持戒持律をせずとも、また難解な読経や経義の理解がなくても、六字名号さえ唱えれば往生できる、とした安易な方法の、専修念仏を指導したのは、中国の善導の方法を採り入れたからであった。ここに、中世の幕があがる。易行往生は燎原の火の如く、大衆層に滲透しんとうしていく。そして、これに伴う大衆仏教への啓蒙・唱導が、種々の中近世の文芸を生んでいくのである。

しかし、それはある日突然に、ただ一人の法然の登場によって移行したものではない。宗教の如き、信仰性思想性の変革は、一つの事実とか一人の力で青天の霹靂の如くに、急激に転換する性格のもので

はない。社祠の発生とか祭祀の起源が、常に一事象の起こる特定の年月日に定められたがる志向が、マスコミ及び学界の悪癖である（社寺縁起類は一事象による起源譚を語る場合が多いが）。心象史が一つの理論に定められないように、これらは大河の水源が渺々たる湿原であるのに同じで、長い時間の胎動期を経て、徐々にその流れを発生させる。庶民浄土教の出發は、たまたま法然の浄土宗専修念仏が契機となったもので、彼の歴史への登場は、まことタイミングを得た絶好の社会情況にあったといえよう。名声から評定すれば、法然ほど時運にめぐりあった（岡山県内の山奥の田舎者に生まれて比叡山に桶ついたのが幸いした）人間はいないといえよう。

法然登場前夜の空也と源信

庶民浄土教の胎動は、法然の登場以前に既にいくつかの事象を、日本史に残している。顕密仏教体制の中にあつて、この国家体制から認められていない贗僧ともいふべき多くの私度僧の発生は、顕密の僧には相手にされなかった一般庶民の心に種々の救いを与えた。彼らは、聖・沙弥・上人などと呼ばれて浄土信仰発達史上の重要な地位を占める。空也（九〇三―七二年）などはその早い例で、後の中世に入ると念仏行者としての修行のほか、「聖」の呼称を継いだ時宗系の念仏聖たちの中には、田楽を始めとする諸分野に芸人たちも輩出させたし、高野聖の如く商売や「護摩の灰」を一例とする詐欺行為者に似た底辺層も少なくなかった。

平安中末期に登場した空也は、被差別層に往生觀を与えた庶民浄土教の先驅者としての顕著な例である。橋や井戸を設けるなど大衆の伝道のために諸国を巡歴し、応和三年（九六三）には鴨川河川敷に（……金字般若經ヲ供養〔日本紀略〕）して、無縁仏を茶毘に付し最底辺のすべての人に念仏をすすめている。度々の洪水のために、広くとられた当時の河川敷は、無税地帯ということもあつて、流浪者の

居住地としても、また葬いも営めぬ貧民にとつての葬制地（というより屍体放置場）としても、最適地であり、河川の氾濫を待つて水葬をして貰うような区域であつた。彼がこの場を選んだことに、被差別の人々への供養が主目的とされていた法会であることが推察される。（半銭の施すところ、一粒の捨つるところ、漸々力を合わせ、微々功を成せり〔本朝文粹〕十三「大般若経を供養する願文」）と記す名文の一節は、過去の仏教の一人の経済力による造仏造塔を、多くの人間の微かな財力を以てする作善行為が可能であると教えている。後世の勧進の常套句となる「一紙半銭の浄財」を以て供養をすすめているからである。

もう一人、体制側の先駆者として、天台宗僧侶の源信（恵心、九四二—一〇一七年）の横川（よかわ）における二十五昧講の主旨も、庶民化前夜の一大業績といえる。弥陀来迎の二十五菩薩に倣つた二十五人単位の善知識をして、病者の看護、臨終の念仏、死後三日以内の埋葬、七七日及び一周忌の供養を、行わしめた宗教的病院ともいえる講である。屍体埋葬などが特記されていること自体に、通常の骸（むくろ）は野ざらしが常識であつた当時の貧富の大きな差が想像できる。日本最初の講の団体の創設といい、臨終念仏の方法といい、また臨終に阿弥陀の手に繋がる五色の幡を握らせたという後世の糸引如来の伝承などなど、中世が踏襲する庶民化念仏のはしりが、種々の面でみられるのである。

庶民仏教化への方法としての唱導文芸

雲の上にあつた古代仏教が、山から一般人の棲む里に下ってくると、庶民の啓蒙のための通俗化の手段は必要であつたし、里の僧侶の生活にしても、妻帯もせず垣を厳重にして隔離された持戒の日々では、一般人も近寄りにくい一面があつたろう。そうでなくとも、大衆の中にわりこんでいくためには難解な読経や経義を繰り返していたのでは、信仰も滲透拡散してはいかない。

仏教が庶民化していく過程には、その手段による、文芸面での種々の形態が表れてくる。今様の法文歌・和讃・経読み・大衆説教・絵解きなどなど、中世への過渡期に表れ出たそれらの一形態といえる。そして、その啓蒙性が説話文学や軍記物を始め『平家物語』が訴えようとする語り物などの唱導文芸と化して、日本文学史の大きな流れとなっていく。

*

平安末期の『梁塵秘抄』は、新しい流行の今様歌を編集したもので、歌詞は卷二の一巻しか残っていない零本だが、その内容には当代の庶民化仏教の熱い息吹きが、強く感じられる（本書第一章古代・中世Ⅰ、二五―四三頁参照）。難解なお経の内容を要約した、そのエッセンスを七五の四句形式に謡いこんだ法文歌が中心で、その他に各地の社寺参詣の案内ともいえるべき靈驗所歌や、体制外の私度僧たちを「聖」として描写した流行歌が多い。社寺参詣歌の類は、今まで貴族しか参らなかつた靈驗地に、彼らが一紙半銭の浄財を以て参詣をしはじめた中世社会の幕あけの徴候を示したものであつたし、「聖」や僧歌の謡われているのも、彼らの姿が市井や里に彷徨しはじめた結果からであらう。非常に少ない「聖」の風俗資料の、これらの今様歌は最適の研究素材にもなっている。そのほかに、当代風俗としての「経読み」や遊女^{あそび}とか芸能流浪民の信仰なども垣間見られるのであるが、詳細は第一章に後述する。

また、語りの方では大衆説教のはしりともいえるべき、比叡山にあつた澄憲が山を下つた。聴衆の庶民化に態度で示した彼は、比叡山東塔の竹林院にあって承安四年（一一七四）には最勝講の論議に彼に及ぶものなし、といわれる弁舌家だったが、安元三年（一一七七）に法印に叙せられてまもなく、里に降る。京都の大宮通り一条北小路の竹林院里坊の安居院に住みついて、道俗の教化に力を尽くす。晩年には、自ら破戒僧として妻を娶^{めと}り、第三子の聖寛を始めとする九男一女を儲けている。その聖寛も、名弁

舌家の血脈を遺伝して、説教を大衆の中に同化していく。彼が、他力本願の弥陀の救いを唱える法然のもとに入門したことも、通俗説教が説話文学を中世文学史の主流に成せる大きな陰の力となっていた。説教の娯楽性は、安居院流とか三井寺派という後世の家元制度に似た説教の流派を生み、唱導文芸の世界に種々の文学作品を遺した。通俗説教が説話文学作品を結びつける典型的な例として、無住の『沙石集』（一二八三年）が挙げられよう。無住は、その序文に（……狂言綺語ノアダル戯レヲ縁トシテ、仏乗ノ妙ナル道〔衆生成仏の絶妙の方法〕ニ入シメ、世間浅近ノ賤キ事〔世間卑近の些事〕ヲ譬トシテ、勝義〔最勝真実の道理〕ノ深キ理ヲ知ラシメント思フ）と宣言をしているし、同序文の終わりには、〈雑談ノ次ニ教門〔仏教の理論〕ヲ引、戯論ノ中ニ解行〔仏理の知識や実践〕ヲ示ス。是ヲ見シ人、拙キ語ヲ欺カズシテ、法義ヲ悟リ、ウカレタル事ヲタダサズシテ因果ヲ弁ヘ、生死ノ郷ヲ出ル媒トシ、涅槃ノ都〔煩惱を脱した境地〕ニ至ルシルベトセヨ……〉として、彼が談義を以て衆生済度する意義（主旨）を述懐している。彼の別著『雑談集』の〈雑談〉の意義も、この序文から汲みとれる。無住もまた、三十八歳までの半生を放浪し、尾張国長母寺（現名古屋市中区矢田町）に定住した僧であった。彼が、世間話や通俗滑稽談などを以て導く中世説教師の型を踏襲して、談義僧としてその勧化の立場を貫いたことは、彼が桑名の蓮華寺を往来しつづけた八十歳余の晩年のスタミナからもうかがわれるところである。やがて、この通俗説教は近世に入つての大道芸における講釈や落語を生んでいくし、仮名草子作家にも僧侶出身の担い手を中心となっていた。近世大道芸のスターたる馬場文耕・深井志道軒・増穂残口といった講釈の人々は、すべて市井の僧の出身であった（本書第八章以下近世Ⅱ―Ⅴ参照）。

絵解きも俗人啓蒙の重要な手段であった。特に、平安中末期には仏教史観にいう末法の到来が予告されていた。その末法の時代に相応したような仏教界の頹廃ぶり（天台宗山門寺門の抗争や南都北嶺の山法師

の強訴などと、古代社会秩序の崩壊（戦乱・天災）は、現世を忌避して浄土へ往生しようという思想に拍車がかけられ、阿弥陀信仰が貴族社会に瀾漫する。道長の法成寺や頼通の宇治平等院などの浄土教寺院の建立などは、この趨勢に呼応したもので観想念仏発達の所為である。阿弥陀堂を中心にした、この美的観想の浄土教寺院の数は、院政期を中心にして十一、二世紀で九十六寺の多きに達している。現存は四寺の堂のみで、浄瑠璃寺・宇治平等院・平泉中尊寺・白水願成寺である（井上光貞『日本浄土教成立史の研究』山川出版社、昭31）。これらの寺院の阿弥陀堂は、極彩色の弥陀来迎の壁画に埋められた。絵解きではなくとも、仮想の浄土を絵に具象化して直接に見て脳裡に描く、というわかりやすい方法は、往生のための非常に重要な手段であった。

もともと『観無量寿経』（略して『観経』）という浄土三部経の一つの、浄土教絵画の基本になった経義は、浄土を観想するということである。観想とは観無量寿と同義と考えてよく、思いを正しく想をこらし浄土の功德莊嚴を念ずること（無量寿＝無限のはかりしれぬいのち）で、眼前に浄土を具象化することとは大切な教えでもあった。阿弥陀を中尊にして、その周囲を『観経』の壁画（観経変）で埋めつくし、寺院の境内を浄土にみたてた庭園にしつらえ、百花繚乱の花々を植え、芳香をくゆらせ、頭密の美貌美声の高僧の大アンサンブルの読経の中で、自己は弥陀の手と結ばれた蓮糸をしっかりと握って往生していくといったあまりにも贅沢な、今日的にいえばあまりにもショー的な、死の儀式を道長とか頼通とか、多くの当時の最高の皇貴族が行っていることに、当代の浄土授得の強い志向も理解されるであらうし、これらの絵画の重要性も納得できる。この種の高貴な寺院壁画の来迎図は、観経変の散善義として、中世には当麻曼荼羅の下縁図に描かれ、中将姫伝説を伴って全国に流布する。その下縁図が独立したのが、諸来迎図である（渡邊昭五「絵解きと庶民浄土教」『二冊の講座 絵解き』所収、有精堂、昭60）。弥陀来迎を念